

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 左右田 直規 印

学位申請者 重松 香奈

論文名

多言語環境シンガポールにおける日本語教育の試み
—発達に課題を抱える子どもと親のエンパワーメント—

【審査結果】

2022年9月22日、左右田直規（主査）、岡田昭人、花蘭悟、伊集院郁子、池田充裕（山梨県立大学）からなる審査委員会は、重松香奈氏より提出された博士學位請求論文「多言語環境シンガポールにおける日本語教育の試み—発達に課題を抱える子どもと親のエンパワーメント—」の審査および口述による最終試験（公開審査）を実施し、全員一致で博士（学術）の學位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

【論文の構成】

序章

第1章 理論的背景

第2章 先行研究

第3章 研究方法

第4章 親への意識調査からみるシンガポールの多言語環境児とコロナ禍の教育

第5章 多言語環境児を育てる母親の葛藤と意識変容に及ぼす要因

第6章 多言語環境下で育つ発達障害児の教育選択と親の意識

第7章 多言語環境下で成長するADHD児の言語発達と親のストレス度との関連性

第8章 バイリンガルADHD児のコミュニケーション能力の向上を目指した実践研究

終章

【論文の概要】

各章の内容は、以下の通りである。

序章では、本論文の目的として、エンパワーメントの概念から多言語環境で発達に課題を持つ子どもの日本語教育とその実践のあり方について検討することを掲げている。本稿

では、多言語環境で複数言語と関わる生活環境に長期滞在し、成長している日本人の子どもを多言語環境児と呼び、多言語環境児を取り巻く環境の特性を示したうえで、多言語環境で育つ子どもたちの言語発達に関連する問題点として親の葛藤や抑圧の存在を指摘している。筆者はエンパワーメントの概念から、多様な言語背景を持つ子どもたちのことばの教育の在り方を検討していく必要性を主張し、多様な言語背景を持つ子どもたちへの日本語教育の実践を検討する研究課題が2点提示されている。

- ① 多言語環境で子育てをする親を取り巻く抑圧や葛藤とはどのようなものか。
- ② 多言語環境で発達に課題を抱える子どもの日本語を育成するための教育実践とはどのようなものか。

以上の設問に答えるべく、第一章では、多言語環境で発達に課題を抱える子どもたちの「ことばの教育」を検討するにあたり、本研究がどのような学問領域の知見を基盤として論を進めていくべきか検討が行われている。その結果、本研究では言語教育と関連する多領域の知見を応用して多角的に研究をすすめる応用言語学に依拠することが有用であると述べ、応用言語学を基盤とすることが示されている。

第二章は、バイリンガル環境で育つ発達障害児の言語発達を研究対象とした先行研究をまとめ、整理している。先行研究においては、バイリンガル環境で多言語を併用することが発達障害児の言語発達に負の影響を与えるといった検証結果は見られず、発達障害児でもバイリンガル環境で育つ方が将来的にメリットは多いといった研究結果が多数示されていることを紹介している。

第三章は、本論の理論的枠組の設定であり、論文全体の研究パラダイムが提示されている。筆者は、現実を批判的に捉えさせることが解放への力となると主張したパウロ・フレイレの教育思想から、批判的意識を覚醒させることで人々がエンパワーメントすることを目指した「批判的アプローチ」を示した。そのうえで、本研究におけるエンパワーメントを「自分たちが置かれた状況に気付いて問題を自覚し、自分たちの立場を選び取る力をつけること」と定義付けている。

第四章から第七章では、研究課題1を明らかにすべく、多言語環境下で子育てをする親が子どもの複数言語獲得に対しどのような意識をもち、親たちの不安や葛藤がどのような要因から発生しているのかを分析している。まず、第四章「シンガポールの公立学校に通う子どもを育てる日本人の親への意識調査」では、多言語環境児を育てる親の多くが、日本にいる子どもと同程度の日本語力が身につくことを期待していることをあげたうえで、親の理想レベルと現実との乖離が「葛藤」の要因となり得ると分析している。

第五章では、永住目的でシンガポールに移住した日本人の母親にインタビューを行い、TEM（複線径路等至性モデル）を用いて親のビリーフの変容過程や変容に影響を与えた要因の分析を行っている。その結果、本事例では親が複数言語を肯定的に捉えることによっ

て親の行動が引き起こされていたと分析している。

続く第六章と第七章では発達障害と診断を受けた多言語環境児を育てる親を対象とした調査が行われている。第六章では、シンガポールの多言語環境で育つ発達障害児の多くが日系の教育機関に通っており、親たちは子どもの複数言語獲得に対してあまり意欲的ではないといった意識の特徴を明らかにしている。

第七章では、言語発達の過程と親のストレスとの関連性についてライフラインメソッドを用いて分析が行われている。その結果、言語発達の未熟さとメルトダウンの回数には相関性が見られ、頻発するメルトダウンは親子関係や家族関係に重大な影響を与え得ることから「親と子どもを結びつけることば」を支援していくことの重要性が指摘されている。

第八章では研究課題2を明らかにすべく、国際結婚家庭のADHD児へ一年間の実践研究を行っている。実践の内容は、日本語のコミュニケーション力の向上を目指したピアノレッスンである。一年間の実践の考察から、子どもの成長を長期的な視点で捉えることの重要性や、子どもの周りにいる関係者たちが、連携・協力し、長期的なまなざしをもって支援するという実践の方向性が示されている。

終章では、これまでの考察を統合し、援助実践としての「エンパワーメントアプローチ」と、当事者自らがエンパワーメントするという「セルフ・エンパワーメント」の二つの側面から「多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育てるエンパワーメント概念モデル」を提案した。このモデルは今後、さまざまな言語背景を持つ子どもたちの状況に合わせて応用できる分析的枠組みとして発展する可能性があると主張したうえで、今後も多様な言語背景を持つ子どもたちに寄り添いながら実践を重ねて検証する、という今後の課題が示されている。

【審査の概要】

本論文に関する公開審査は2022年9月22日（木）10時00分から約2時間をかけて、ZOOMによるオンラインで実施された。審査委員会の構成員は、左右田（主査）、岡田、花蘭、伊集院、および外部審査員として山梨県立大学の池田氏の5名であった。審査では、はじめに著者から本論文の概要や主旨についての説明がなされ、その後に各審査員との間で質疑応答が行われた。

本論文は以下の点において高い評価を得た。まず、シンガポールに在住する日本人のコミュニティ調査が不足している中、シンガポールの公教育を受ける子どもを育てる親の意識に注目し、その意識の特徴を明らかにした点が評価された。

つぎに、発達に課題を抱える多言語環境児を対象とする研究が極めて少ない中、本論文が発達障害とバイリンガル環境との先行研究を渉猟したうえで、発達に課題を抱える多言語環境児への言語育成の在り方について論じた点も高く評価された。

さらに、今後、多様な言語背景を持つ子どもたちが増加する可能性を見通したうえで、

多様な言語背景を持つ子どもの日本語を育てるエンパワーメントモデルを作成していることに関しても高い評価を得た。

以上のようにこれまで研究が不足していた対象に光を当て、多様な言語背景を持つ子どもたちの日本語を育てるエンパワーメントモデルを提示したことは、今後における学術と日本語教育実践の双方の発展に貢献するものであると言える。

他方、問題点としては以下の点があげられた。まず、タイトルに日本語教育を掲げている論文としては、第八章で子どもの日本語能力がどのように伸びたのか（語彙が増えたのか、感情が伝えられるようになったのかなど）、言語能力の評価に関する記述が不足していることが指摘された。また、副題では「子どもと親のエンパワーメント」と示されているものの、本稿では「親」に焦点があたり、子どものことに対する言及が少ないことから、子どもの言語発達に関する継続的な観察を行うことが今後の課題として挙げられた。

つぎに、本研究がさまざまな質的研究法を用いている中、アンケートの記述部分に定性的コーディングを用いて分析した意図や、それぞれの研究で用いた研究手法がどうして最適だと判断したのか、その採用理由をより詳しく提示する必要があったのではないかという点が指摘された。

さらに、マクロレベル、メゾレベル、ミクロレベルの検証に関し、ミクロレベルについては詳細な記述がなされていたが、メゾレベルにおける学校の検証についてはシンガポールにおける教育制度をより反映させて分析を行う余地があることが指摘された。

以上、審査においては日本語教育における実践の質的研究においてより厚い記述が求められる点や多少の誤字脱字に関する指摘があったが、著者からはこれらを自覚したうえでの誠実な返答があり、今後の研究における改善や発展が期待されるものであった。全体としては学位論文としての独自性があり、本学の博士学位論文評価基準にある「博士学位論文において達成された内容が、実務や教育の場などにおいても、十分な貢献をなし得る」ことが認められた。

公開審査終了後、論文審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士論文としての水準を十分に満たすものであると評価し、博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に達したことをここに報告する。